

# 福岡千鶴子と醇次郎——鎮魂の通奏低音

坂口 博

はじめに

古典再読として佐多稻子「樹影」(70・8・72・4)を取りあげるにあたり、あらかじめいくつかの課題を想定した。まず被爆者と非被爆者に、小説表現の方法上の相違が見られるか否かを、具体的に検討したいこと。特に原爆投下直後の惨状の描き方の違いに着目したかった。次に、原爆に限らず大きな出来事／事件にどうなう、当事(当時)者性の問題を、そこから引き出したいこと。

一般的にいえば、「当事(当時)者は全体が見えない」という命題<sup>チセ</sup>から、当事(当時)者の言説の持つ暴力性を検討したいと、考えた。

しかし、今回は、ここまで進めなかつた。時間がなかつたのではないかし、論理的にも、情感的にも、不可能となつた。浮かび上がつたテクストの向う側の存在が、このまま先へ進むことを阻んだのだった。テクスト外の情報や、モデルに固執したくないため

に、逆にモデルについては、一定のレベル(公刊・公開された資料に基づく。非公開の手記・手紙などは基本的に対象としない)まで明らかにしたいと考えた。また、作者=佐多稻子の意図にも拘束されないために、彼女の長崎に閲した作品は、一応、辿つてみることとした。ただ、これは既刊の十八巻本『全集』(講談社)などによって視野に入る限りであつて、全著作の悉皆調査ではない。その作業によって、池野清(1914・3・23～60・8・12)の『画集』(同刊行会、61・12、62・2＝2版)のなかから、第28回独立展に遺作として展示された50号の油絵「木立」「樹骨」、ほかの絵画も見ることができた。ここは「樹影」や「色のない画」(61・3)の描写と、実際の絵画とのあいだに差異を見出すのが難しいことを指摘するだけで、それ以上は立ち入らない。

## 1 「樹影」のなかの挿話

時系列に佐多稻子の「長崎」作品を読むなかで、「樹影」の主

人公の二人よりも、福岡千鶴子の存在が大きく浮かびあがつてき  
た。いくつかの作品で登場する彼女の眼差し／視線、それらがか  
すかな声で「私も忘れないで」と呼びかけてくるようだつた。毎  
日新聞「メディア時評」(15・3・7)でも触れたが、「仕合せと  
命」との一節、彼女の「命の奪われる瞬間」に、作者とともに思  
いをはせたいと願つた。

西日本新聞の戦後70年対談「音と言葉の戦後」(15・1・17)  
によれば、青来有一も「原爆では爆発後3秒の間に多数の方が亡  
くなり、そのほとんどが名前も分からぬ、永遠に語り得ない証  
言者。この人たちの聲を文学や想像力でよみがえらせたい」と語  
つてゐる。共感できる言葉だ。かつて「欠如の記録」—長崎原爆の  
周辺」という拙い論考を「絞説」19号(99・8)に書いたことが  
あつた。そこでも論理的には破綻を承知で「欠如」に拘つたが、  
それからほどんど変わっていない。変わりようがない。ここでも  
関心は、死者の「沈黙」の重さに、「欠如」の重さに、千鶴子の  
存在に向かつていかざるをえない。

巷間よく言われるように、人も作品も二度死ぬだろう。一度目  
は肉体的な死(作品なら絶版)によつて、二度目は忘却によつて。  
もちろん、非情と思われようとも、忘れていいものは忘れた方が  
いいと考えている。消えた方がいいと思つてゐる。キリスト教の  
ように、誰も彼もが「復活」する必要はない。しかし、原爆の死  
者たちは違う。ホロコースト・南京大虐殺・従軍慰安婦と同じく、  
その死者の声に、今後も耳を傾けていきたい。生き残つた者の「証  
言」は、極論すれば、それを媒介するものであろう。文学の課題  
として、なぜこのような不可能な問題を考えたいかといえど、そ

れぞれを抹殺しようとする歴史修正主義への批判的視座を持ちた  
いと願うからだ。彼らの方向に添うならば、将来「ヒロシマ・ナ  
ガサキはなかつた」、少なくとも犠牲者数の大幅な見直しといつ  
た主張が出てこないとも限らない。荒唐無稽な話とは言えない。  
すでにほかの事柄では、似た方向に向かつてゐる。

そのようなことを考えたとき、福岡千鶴子を無数の「無名」の  
死者のなかに消すこと、忘れ去ることはできなくなつた。もちろ  
ん、指摘するまでもなく「無名」は本来ありえない。それぞれ個  
別の名前、固有名詞を持つ存在だ。随筆「十年目の長崎」(55・  
8)では、次のように触れる。

その一瞬の死者、七万三千八百八十四人、といわれ、この数  
の中には私の、東京で暫くは一緒に暮らした女友達もいた。

(講談社文芸文庫版『私の長崎地図』) p.178 以下『長  
崎』と略記。傍線は引用者、以下同じ)

個々を単なる「七三、八八四」分の一とはできない。それぞれ  
も、統計数字の一人ではない。佐多が指摘するように、個々に生  
活を持つた人々なのだ。佐多と同様、唯一のかけがえない存在と  
して、千鶴子は甦つてくる。「樹影」のなかでも、主人公ふたり  
は、むしろ飛んでしまつて、以下にあげる挿話に注目した。  
なお、本論では、虚構の小説世界の登場人物も、その作品のな  
かに限定することなく、モデルとなつた実在の福岡夫妻と同定し  
て扱つてることを、予め断わつておく。

麻田晋の親しい友人がいる。戦前の思想弾圧で検挙され、刑  
をすませて出所したあとも不自由な日常にひつそくしていた

その友人が、今は公けな政治活動に入つて、その組織の中心になつてゐる。……麻田自身が、太平洋戦争の起つた翌年のはじめ、友人が再び検挙されたときに彼も同時に逮捕され、

治安維持法による七ヶ月の未決拘留を経験したからであつた。……上海行きがこの友人と一人連れだつた、ということも、取調べの大きなひとつになつたものだつた。(一) 講談社文芸文庫版『樹影』＝88・2＝ pp.21-22 以下、引用は同じ)

麻田の友人である(一)の責任者も、長崎の痛恨を抱いてゐるひとりだつたのである。彼の妻は三年前の八月九日、働いていた三菱兵器の工場にて、そのまま、遺体もわからなかつた。狭いこの街で十年余りを、思想犯の夫をかばつて生きていた妻であつた。常に何かをひそめたように光つた目をしていた。職につけぬ夫の代りに働いて、夫の友人が訪ねて来ればそのときは自分もいつしょに雑談に加わつたりもし、色白の小柄な身体をきびきびと動かして、彼女を麻田もよく知つてゐる。……しかしその友人も、妻の死について殆ど語ることはなかつた。それは今も彼自身に劇しい痛みだつたからにちがいない。麻田も、友人の痛みに触れることを避けてゐる。(一) pp.23-24)

これまで管見できた佐多稻子の「長崎」作品のなかで、二人がモ<sup>デ</sup>ルとして登場する小説は「視力」(40・11)「歴訪」(51・7)「仕合せと命と」(55・8)「時に佇つ(その八)」(75・8)の四篇がある。発表順に見ていく。

## 2 二人をモ<sup>デ</sup>ルにした作品

貞子が、東京の藤子の家に一年ばかりいて、長崎へ帰つてからもう五年ばかりになる……長崎の官立のある病院で一等看護婦として働いているうちに、彼女は職場も故郷も追われなければならぬことをしたのである。それは今から五、六年も前の社会の出来事としては別に珍らしいことでもなかつた。仲間だつたものの大半が新しい組織に移つてこようとした。なかつた。麻田晋の親友で慶子とも日常的に親しかつた一人も、向うに残つた。……麻田晋と彼女のこととも知つていて、貞

麻田の死後は何かといたわりも示してくれた友人である。(一)十一 pp.349-350)

子は東京へ出てきて、派出看護婦になつたのであつた。(五  
月書房版『私の長崎地図』) 48・10 pp.154-156)

「長崎の安井夫婦の家の」二階はがらんとしていた。といつても一つの部屋には本や新聞が畳の上に乱雑におかれたまゝ、小さな机がその間に横つちよにおかれて埃をかぶつていた。……小さな西洋人の胸像がひとつ部屋の隅にぼつんとおいてある。(前同 p.62)

藤子は安井たちの二階に、二晩泊めてもらつた。(前同 p.170)

「視力」では、一九一五年から二十五年振りの帰郷が描かれる。「半月足らず朝鮮鉄道局のお客さん待遇」であちこち見物して歩いたあと、「下関で連れと別れて、藤子はひとりで故郷へ立ち寄る」のだった。「年譜」によるならば、このときの「連れ」、朝鮮観察旅行の現実の同行者は壱井栄だつた。ここでは作品内時間も同じだから、原爆以前の作品であることに注目しておきたい。

「五、六年も前の社会の出来事」(一九三三年二月一日の「九州共産党事件」)に関して、簡単に触れておく。

「九州共産党事件」とは、福岡で中野重治・原泉の友人だつた西田信春が特高警察に殺されたことで知られる。宮崎県を除く、九州六県で検挙五〇八名、うち起訴八〇名を数える。福岡県が多く三三三一五〇名で、長崎県は四〇一三名。三名のうちの一人が福岡醇次郎(1904・4・9~86・1・9)である。特に女性へのフレームアップ(顔写真を伴う新聞報道)は激しく、福岡では牛島春子・中本たか子などが、その犠牲となつた。牛島も福岡における満洲へ夫婦で渡る契機となる(石堂清倫・中野重治・原泉

共編『西田信春書簡・追憶』)土筆社、70・10(参照)。事件当時は報道規制もされ、起訴や一審判決をまつて新聞報道も許された。長崎では一九三三年九月一日の「長崎新聞」号外が、顔写真付きで報じた。福岡醇次郎の「同棲中の情婦」として、起訴猶予になつた相川チヅ子にも大きく焦点をあてた。「西彼杵郡長浦町尾戸郷出身、鶴鳴高女卒、看護婦、24歳」といつた情報も公開する。まさに「狭い町の中には身のおき場」もなくなつたのだ。

のち結婚する福岡醇次郎については、治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟「不屈」三九七号(07・7)に来歴が詳しい。戦前からの一貫した日本共産党の活動家で、本籍は佐賀市高木町。三菱工業学校・東山学院を経て、第五高等学校から東京帝国大学文学部英文科に進学したという。「九州共産党事件」当時の住所は長崎市十人町だつた。彼は、懲役三年の実刑を受け、諫早刑務所に下獄している。出獄は三六年秋という。日米開戦とともに治安維持法によつて予防拘禁、敗戦も福岡市の藤崎刑務所で迎えたため、原爆の犠牲も妻だけだつた。検挙三回、獄中生活を八年。戦後は、日中友好協会長崎県連会長など、党活動以外にも役職を務めてい

多枝が戦時中に知り合つて、数ヶ月は東京の多枝の家で一緒

さて、次の「歴訪」では、一九五〇年「長崎の六月はじめ」が舞台。「先年、二十五年ぶりに帰つたときに知り合つた一人の画家で、その後付合いがつづいて」いる立野が登場する。この先年は、前作「視力」の一九四〇年だから、十年前になる。

に暮らしたことのある女友達も、丁度競輪場のあるあたりの工場に働いていて、原爆で死んだ。(文芸文庫版『長崎』p.141) 戦争中にも、レーニンの像と、マルクス主義の本をその他に何もない荒れた部屋において、生活していた福井であつた。

戦争の終り近くからまた刑務所に入つて、終戦もそこでむかえ、妻の死もあとで知つたという彼であつた。……部屋に泊めてもらつたことがある。(前同 p.144)

立野の妻は、間に襖のない上り口の三畳にさつき多枝のふとんを敷いて階下へ降りていた。……「そのふとんも寝巻も、みんな、慶子さんから借りてきたのですよ」／と立野が言った。(前同 p.152)

この時、作者＝佐多稻子と同定できる多枝は、画家・立野の自宅に宿泊する。十年前は福井夫妻(「視力」の安井夫妻)の家に泊まつたのだが、今回は出来なかつたのだ。それで、十年前に知り合つた画家・立野夫妻の世話になる。のち「樹影」の主人公になる二人も登場する。立野は麻田晋に、慶子は柳慶子に重なつてくる。ここで、前の作品のなかで検閲に配慮して触れることが出来なかつたマルクス・レーニンの名前も出ている。初めて、千鶴子の原爆死が触れられた。

次に来るのは、「仕合せと命と」である。その一節は、本稿の冒頭でも紹介した。

その人の思い出が新たになる。故里に帰る毎に、そして年が、八月がめぐつてくる度に。その人を不幸であつたと、人

はいうのであろうか。私にはそれを拒む気持がある。不幸とは何だろう。その人は仕合せであつたはずなのだ。夫を愛し、夫に愛されていたその人は、仕合せであつたはずなのだ。(文芸文庫版『長崎』p.189)

多枝さんはこんないきさつで、一年余り私と共に暮らした。夫が出獄するとき、長崎へ帰つていった。／今度は私が長崎を訪れた。(前同 p.194)

その多枝さんは、長崎に落とされた原爆の犠牲になつた。私がそれを知つたのは、長崎のもうひとりの友人の知らせによるものだつた。終戦後、私はもう三度帰郷した。……〔浦上の天主堂〕この丘の下の今は競輪場に変化したあたりを見つづ、多枝さんの生涯へのおもいをゆすらっていた。……多枝さんを不幸であつたなどと、私は言わない。多枝さんはその仕合せを、けなげに守つて生きていた。その仕合せと、けなげな命とを奪つたのは、戦争と原子爆弾である。それはも早、不幸であつたということではすまないので。はつきりとした原因があるとき、不幸であつた、と云いますことができない。犠牲は、それを負わした原因に罪が問われねばならない。(前同 p.198)

いつも何かの感じをこめて大きく見ひらいていた多枝さんの目に、最後の一瞬のおもいをこめる隙があつたであらうか。その瞬間さえなかつたであらうか。その人の生涯の一時期に、一緒に暮らしたことのある私は、多枝さんの命の奪われる瞬間を、想いめぐらしておかねばならない。原爆の犠牲の無数の命が、それぞれのおもいをこめた一人々々の人間の営みの、

中途で絶たれたものだ」ということが、私にとっては、多枝さんによつて実感となるのだ。(前同 p.199)

「歴訪」の多枝と、この短篇の多枝、名前は共通している。前者は作者と同定できたから、ここでは、作者自身を、「仕合せと命と」の「多枝」に重ねていく。いさきか煩雜な「年譜」的事項だが、ここまでの戦後の「帰郷」は、一九五〇年と五五年六月の二回が知られている。五〇年までに、ほかの帰郷の可能性は、「月刊長崎」に「私の長崎地図」(48・2・8)を連載したあたりだろう。

この「仕合せと命と」は、かなり強引な内容だ。作者は自らに無理に言い聞かせるように「仕合せであつたはずなのだ」と繰り返している。千鶴子の存在によつて、長崎原爆が実感となつてゐるのだが、その試みは成功したとは言えない。

ところで、「樹影」のあとにも、福岡千鶴子をモデルとした作品がある。「時に併つ」の「その八」である。ここでは、「仕合せであつたはず」の彼女の慰靈が終えていないことが語られる。

浦上のこの辺り、あのとき安井貞子のいた軍需工場のあつたのはこの辺りのはずだ。彼女の遺体は遂にわからなかつた。彼女の死の間ぎわはどうだったのである。……彼女の死の間ぎわを思い描いてみると、どう操作はできはしない。今も私は、浦上、安井貞子と、ただそれだけを念頭に浮ばせたにすぎない。……／安井貞子はあのとき、三十をいくつか出たくらいであつたろう。夫と、幼い女の子ひとりを残して死

んだ。夫は治安維持法で諫早刑務所に拘留中身体を弱めて、派出所したあともすつと療養しているはずだつた。その夫と、ひとり子を残して彼女はその軍需工場で死んだ。彼女をおもうと、色白の丸顔を真正面にこちらに向けて、何かを聞いたげにじつと見つめる大きな目が先ず浮んでくる。何かもの悲しげでもあり、一途さも光る独特の目であつた。……彼女の死んだあとはまた、安井貞子というひとりの女が、あの視線に凝結するようにおもえるのだ。……／安井が治安維持法で逮捕され、正式にはまだ結婚前だつた貞子のことを興味的に書き立てた記事が地元の新聞に出たりして、看護婦だつた病院の勤め先も、また長崎の町そのものにも居られなくなつて上京したという。……こうして彼女は私の家で一年ほどいっしょに暮らしたのである。(講談社文芸文庫版『時に併つ』) 92・8 pp.120-122)

三年ほどして私が長崎へ行き、前ぶれなしに安井夫婦の家を訪ねたとき、……貞子の目、……見上げたときの視線も、私は同じ目に見えた。／彼女の最後のときは、とひとり言の問い合わせをして、それはそこで跡絶えるしかないが、そのあとに、貞子のあの視線だけは浮び出てくる。何か聞いたげに大きく見ひらかれた目、悲しげに一途な光りをたたえたあの目。しかし私は、貞子のその視線を長くは見つめ得ない。その視線が、彼女の最後のときに結びつくに堪えられないのだ。／……彼は私に、貞子の死について何もしゃべらなかつた。彼が云わぬ以上、こちらから云い出せはしない。ながさきの犠牲は、当時のしばらく誰もそれについて云うのを避けてい

たろうか。（前同 pp.122-123）

「仕合せと命と」では、彼女の死の瞬間を「想いめぐらしておかねばならない」としていたのに、「思い描いてみるなど」という操作はできはしない」となつたことに注視したい。

登場人物名を整理しておこう。福岡千鶴子は、安井貞子（视力）・福井敏子（歴訪）・宮島多枝（仕合せと命と）・安井貞子（時に佇つ）と変わり、夫はその姓のみ。作者＝佐多稻子と同定できる人物は、藤子（视力）・多枝（歴訪）・「私」（仕合せと命と）・「時に佇つ」となつてゐる。「多枝」の名は、千鶴子に与えたので使えなくなる。「時に佇つ」で、三十五年前の名前に戻したことにも着目したい。

### 3 隨筆のなかの二人

小説作品を補充する意図で、佐多稻子が福岡千鶴子に触れた隨筆を拾い出しておこう。

「十年目の長崎」（55・8）は前に触れた。翌年の「故郷の瘡痕」—第二回原水禁世界大会に出席して（56・10）では、「私は、ここにあの時命をうばわれた私の親しかつた女友達を胸において黙禱した」（『全集』第17巻＝79・4＝p.31）と語る。

「折り折りの人（池野清のこと）」（66・12）には、「戦争が次第に拡大される様相を示し、世の中が暗く湿つていたときである。ひとりの若い女性が訪ねてきて、まつ黒な瞳をおもいつめたよう

に大きくして私を見つめた。そして、ほとばしるような口調で「長崎からまいりました」といつて頭を下げた。福岡千鶴子という人であつた。夫が思想犯として諫早刑務所に投獄されている。長崎に居られず上京して、派出看護婦会にいて働いているが、収入も少なく、五銭の白飯に食塩をふりかけて食べるときもあり、やりきれなさで訪ねてきた、という。この人はそれから夫の出獄するまでの「年ばかり私の家にいた。／彼女が長崎に帰り、それを私が訪ねて、このとき彼女たち夫婦の友人、池野清を知つた。……／福岡千鶴子の話から書き出したのは、彼女が長崎の原爆で死んだことをおもい出すからである。原爆投下の中心地に近い三菱の工場に戦時動員で働いていて、そこで死んだ。病弱な夫と、ひとりの幼い女の子が残つた。苦勞のさなかだつたと、おもうから、彼女の命がそこで吹つ飛んだことが可哀想でしかたがない」（『全集』第18巻＝79・6＝p.81）と、実名を含めて、かなり正確な記述となつてゐる。佐多稻子から福岡千鶴子、さらに福岡醇次郎・池野清、そして林芳子へと繋がる友人の連鎖が窺える。なおだけが、今のところ「福岡千鶴子」の名前が明示された文章だ。他には見出せずにいる（醇次郎に関しては、その立場を慮つたものか、名前を明記した佐多の文章を見ない）。

「私の中の「ふるさと」」（90・5）にも、「一年ほどの間、私の家を手伝つてくれた人だ。……戦争中のその後、この人は軍需工場に働いて、八月九日の空襲のとき、その工場で被爆して、遺体さえわからなかつた。夫と幼い女兒をあとに残しての被爆であつた。痛ましい、激しい生涯であったとおもう」（中公文庫版『あとや先き』＝99・3＝pp.187-188）といった回想を見るのだつた。

福岡千鶴子が、作者にとつていかに大事な存在かは、第二回原水禁世界大会の黙禱で、「胸において」いたことでも理解できよう。

「樹影」を書き上げ、長崎への鎮魂は果たしたかと見えても、

作者のなかで福岡千鶴子の鎮魂は終えていない。「時に佇つ」のなかで、再び福岡夫妻に触れざるを得なくなる。「折り折りの人（池野清のこと）」で「可哀想でしかたがない」と云い、「時を佇つ」では視線に「堪えられない」と、死者の声を聞くことが出来ずにある。特に身内や親しい者の場合、これはそれほど困難な試みだろう。しかし、常に視野に入れておくこと、「忘れないこと」、それだけが野蛮な現代を生きる者の務めと考える。

また、佐多の伝記的事項に関連すれば、千鶴子の東京滞在は數ヵ月から二年と幅を持つているが、「一年余り」が妥当なところだろうか。戦後の帰郷も、一九四八年は全集年譜などでも確認できないが、前述したように、この年には「私の長崎地図」の連載や刊行が続くので、それに関連して数度の帰郷が実現したのかも知れない。

おわりに

最後に、「樹影」の冒頭を思い起こそう。

「あのひとたちは何も語らなかつただろか。あのひとたちは本当に何も語らなかつただろか。あのひとたちはたしかに饑舌ではなかつた。それはあの人たちの人柄に先づよつていった。……このひとたちのおしゃべりでないのは、たしかに先ず

そういう人柄のせいだつた。あるいはこのひとたちは……（二 前同）

「このひとたち」は、麻田晋と柳慶子に限定されるが、「あの人たち」には、直接的に「麻田の親友」、そして原爆死した「妻」を含み、さらに原爆の死者たち全般にひろがつていく。親友夫妻（福岡千鶴子・醇次郎がモデル）を媒介にしないと、単なる個別と普遍の関係にしか見えない。友人は「妻の死について」饑舌ではなかつた。そうした人たちの典型として登場する。麻田晋と柳慶子の物語は、親友夫妻の物語に挟み込まれている。そして、この夫婦に固有名を与えなかつたことで、作者も消すことが可能となり、「私」の物語ではなく、「このひとたち」の物語として小説世界を構成することができた。

しかし、それでも「樹影」の通奏低音として福岡千鶴子の「声」、「私も忘れないで」が聴こえてくる。もちろん、作品中では名指されていないし、それは無数の死者たち、そして生者たちの「声」へとつながつてゐる。それらの上に、「樹影」のふたりの物語は展開すると捉えていきたい。

#### 〈参考〉池野清の装幀と五月書房について

「池野巖さんの装幀」（90・10）のなかで、佐多稻子は「池野清の装幀は、『智恵の輪』（現代社、56・2 現代新書19）という短篇集で、文庫本より少し長目の本である『新書判』。灰色に黒線で窓辺の線を描き、華やかな黄色で全体に点々が描かれている。

池野清の装幀はこの「冊しかない」（中公文庫版『あとや先き』前同<sup>〔49〕</sup>）としているが、五月書房版『私の長崎地図』（ほかに旧作「台湾の旅」と「視力」を収録。48・10）も、池野清の装幀である。現在のところ、彼の装幀本は二冊が確認できる。

五月書房は、佐世保市から福岡市へ移った出版社・九州評論社の後身である。福岡から東京へ本社を移したものとの、しばらくは福岡にも事務所を置き活動をしている（九州評論社の最後の刊行書『私の青春時代』（48・8）と発行者は異なるが、福岡市の住所、および印刷所は佐賀県鹿島町の鹿島印刷株式会社で同じだ）。

九州評論社にいた井上光晴は、「敗戦直後、九州評論社（佐世保市）で刊行した『私の長崎地図』の編集者兼校正者となつた後」（講談社文芸文庫編『個人全集月報集』（佐多稻子全集））|| 14・8 || ヨーキュト<sup>〔50〕</sup>と記すが、前記の経緯を少し錯覚したものであろう。五月書房版『私の長崎地図』に関わった事実は確認できない。また「私の長崎地図」連載誌「月刊長崎」は、長崎日日新聞社が一九四七年に創刊。刊行時期・総目次など、詳細は不詳。

いずれにしても、敗戦直後に日本共産党的出版部門で、九州評論社から五月書房は重要な役割を果たしている。五月書房からは、文学関係では、ほかに小池富美子『ある女子共産党員の手記』（48・11）中本たか子『愛は牢獄をこえ』（50・1）などを刊行。伊豆公夫『現代史』改訂版（49・6）の序文には、「本書の初版は、一九四七年六月に出た。……今度原発行者である九州評論社の後身五月書房から再刊をもとめられた」と記している。